

## 意味条件にもとづく文構造の研究-自発・中間・使役文の日韓対照を通して-

著者	千 昊載
号	62
発行年	1998
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14322">http://hdl.handle.net/10097/14322</a>

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 62 号
学位授与年月日	平成10年 7 月 9 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 英文学英語学言語学専攻
学位論文題目	意味条件にもとづく文構造の研究－自発・中間・使役文の日韓対照を通して－
論文審査委員	(主査) 教授 平 野 日出征 教授 村 上 雅 孝 教授 千 種 眞 一 助教授 後 藤 齊

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、統語構造と意味構造の関係に関して、自発、中間、使役構文をとりあげて、その意味構造が幾つかの意味条件および意味規則によって得られることを明らかにすることである。これらの構文については先行研究が多いが、それらは必ずしも満足のゆく分析を提示するものではない。従来の研究では、構文のもつ全体的意味は、動詞を構成する接尾辞の意味特徴に支配されるとされ、これらの構文があたかも基本構文から成り立っているかのように考えられている。すなわち、動詞を構成する接尾辞の形態と意味が合致していること、ひいては、ある構文がもつ全体的意味は、動詞を構成する接尾辞の意味特徴に支配されることを意味する。しかし、実際には動詞を構成する接尾辞の形態と意味は一致しない場合が多く、その帰結としてこれらの構文は多義性をもつ。そこで、本研究の提案するアプローチによってはじめてこれらの構文が十分に解明できることを明らかにした。

自発文では、基本的構文ではなく自動詞構文と受動構文の統語構造から、一定の意味条件が

適用されてはじめて自発用法が得られると考え、自発文の成立に必要な意味条件とその妥当性について述べた。中間構文では日本語、韓国語、ロマンス語の中間動詞の形態的特徴にもとづいて、中間構文形成規則という意味規則を提案し、中間構文が派生的に得られる構文であることを述べた。使役構文では韓国語と日本語の使役構文の相互間にみられる違いを説明するために、意味受動化操作を提案し、その操作と使役の意味の関連について検討した。

本論文の構成と内容の要旨は次のようになっている。

第1章では、本研究の目的と構成について述べた。本研究では文構造の多義性を意味の条件および規則によって明らかにすることを目的とした。ある一定の統語構造をもつ基本構文に特定の意味条件および意味規則が適用されてはじめて自発文、中間構文、使役構文の意味構造が得られること、この立場に立って、英語、日本語、韓国語、ロマンス語の間にみられる違いを意味条件および意味規則をもとに解明することも目的とすることを述べた。

第2章では、日本語の自発文の意味構造は基本構文のもつ統語構造そのものからではなく、一定の語彙的意味をもつ自動詞および受動形の動詞の統語構造から派生的に得られる用法であることを示した。先行研究によって提案された自発文の形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴は、自発文を他の構文と区別できない。このことは自発文が他の構文と比べて意味的制約が多いことを意味する。換言すれば、自発文が自動詞構文、受動構文、可能構文、結果構文、中間構文との形態・統語・意味的な類似性が多いため、他の構文と区別可能な意味的制約を導き出す必要がある。そこで本論では、自発用法をとりまく周囲の用法との類似性および相違点を述べることによって、自発の意味構造が他の用法、すなわち自動詞用法、結果用法、可能用法、受動用法、中間用法のもつ意味構造とは区別される独立した一用法であることを述べた。

第3章では、自発文の意味構造は自動詞構文と受動構文のもつ統語構文そのものからではなく、一定の統語構造をもつ自動詞構文と受動構文に主語の行為者性を適用することによって派生的に得られると考えるとともに、その意味構造が得られるための意味条件とその条件の妥当性を議論した。本論では、まず自発の意味構造を成立可能にする特質として主語の行為者性(agentivity)に着目し、自発用法は無生物主語に組み込まれている行為者性による自発的な状態変化を記述するという意味構造をもつことを示した。

行為者性のあり方の違いをもとに、自発用法は「無生物主語の行為者性にかかわる条件」「無生物主語が自然行為者の行為対象である条件」「有性主体の無意志的な行為にかかわる条件」という三つの意味条件が必要であることを示した。これらの意味条件は、自発の意味構造が得られるために、主語の行為者性がどうあるべきかということであり、同時に三つの意味条件のなかで何れかが適用されている場合、自動詞文と受動構文から派生的に自発の意味構造が得られることを述べた。これらの三つの意味条件は次のように説明される。

まず、「無生物主語の行為者性にかかわる条件」は、主語（基底の目的語）に組み込まれていなければならない条件である。この意味条件を満たす自動詞構文では外部行為者は、統語上にも意味上にも含意されない。このことは、述語が主語の自発的な状態変化を記述する非対格自動詞であること、使役化の操作を許容すること、動作の自発性および自動性を表す副詞との共起を許容すること、無生物主語の自発的な状態変化を含意すること、外部行為者の関与を示唆する表現との共起を排除することにもとづいていることを示した。

次に「無生物主語が自然行為者の行為対象である条件」は無生物主語が自然行為者（natural agent）の外力を受け、本来潜在していた行為者性が活性化するということである。すなわち、無生物主語に本来的に付加されている行為者性だけでは状態変化の能力を十分に発揮できず、自然行為者の補助によって本来の行為性が促進されなければならない。したがって、この条件を受けた無生物主語は自然行為者の行為の対象というよりは、状態変化の実質的な主体として解されることを示した。

最後に、「有性主体の無意志性にかかわる条件」である。含意されている有性主体の無意志的行為は自分では制御できないものである。有性主体の無意志的な行為によってあらわされる主語は、主語そのものがもっている行為者性（外的要因と内的要因にあらわされるもの）により活性化する。つまり、有性主体の意志に依存せずにある状態がひとりでに現存するということによってこの条件の妥当性を示した。

第4章では、日本語、韓国語、ロマンス語に英語の中間構文に相当する構文が存在するか、もし存在するとすると、それぞれの言語は、どのような文法的な表現のしかたをするのか。また、中間構文的概念を表すために、ある特定の文法形式と構造が異なっているのにもかかわらず、なぜそれぞれの言語の中間構文は、基底の目的語が指示する主体と不特定多数の行為者の行為一般との関係を表す意義しかもたない点で一致するかについて議論した。すなわち、本論では、近年、英語生成文法および言語類型論の一部で取り扱われている問題圏のなかで、中間動詞の概念を日本語、韓国語、ロマンス語文法に適用すべきかどうかを考察した。

本研究は中間構文を状態的な意味をもち、主語の総称的な特性を記述し、受動の意味をもちながら受動変形の適用を受けない他動詞形または自動詞形の動詞を述語とする構文であると定義した。この定義をそれぞれの言語に適用するとき、まず、それぞれの言語の中間動詞とその基底の他動詞との間の形態上の関係が問題となった。そこで、日本語、韓国語、ロマンス語の中間動詞の形態的条件を観察した結果、ロマンス語の中間動詞は受動形態素、すなわち、接語（clitic）が動詞に前接（または後接）した形をとること、日本語の中間動詞は自動詞化形態素および可能形態素と結合した形をとること、韓国語の中間動詞は基底の他動詞と同形をとるもの、受動形態素をとるものがあることを指摘した。

しかし、それぞれ異なる形態的特徴をもつ中間構文は、それぞれ異なる形態的範疇をもつ基本構文から派生的に得られることを考慮しなければならない。なぜなら、上記の形態的特徴をもつ基本構文の統語構造では特定の行為者を項としても補句としても統語上顕現されうることから、中間構文の意味構造、すなわち、主語が指示する主体と一般者の行為一般との関係を表す以外の意義をもちえないことを明らかにすることができないからである。換言すれば、日本語の中間構文は形態統語的に可能構文、自動詞構文、韓国語の中間構文は受動構文、自動詞構文、ロマンス語の中間構文は受動構文、自動詞構文、再帰構文、相互構文などと類似しているために、中間用法の存立を可能にする意味的、統語的特徴を提示しなければならない。そこで、本論では、日本語の中間構文は中間自動詞構文、中間可能構文として自動詞構文と可能構文の統語構造から、韓国語の中間構文は中間自動詞構文、中間受動構文として自動詞構文、受動構文の統語構造から、ロマンス語の中間構文は中間受動構文として非人称受動構文の統語構造から派生的に得られると考え、それぞれの言語に特定の中間構文形成規則が適用されてはじめて中間構文の意味構造が得られることを示した。

それぞれの言語に特定の中間構文形成規則が適用されてはじめて中間構文の意味構造が得られるという事実を、それぞれの言語が基底の目的語の被影響性を記述する DO 動詞に限って中間用法を許容すること、基底の他動詞形（CAUSE 動詞）と形態的対立をもつ動詞ともたない動詞が中間用法を許容することから検討した。その結果、日本語の中間構文形成規則は、基底の目的語の一定の状態変化を記述する自動的および可能的意味構造に適用され、そのような意味構造をもつ動詞だけが中間用法をもちうること、韓国語の中間構文形成規則は、基底の目的語の一定の状態変化を記述する自動的および受動的意味構造に適用され、そのような意味構造をもつ動詞だけが中間用法をもちうること、ロマンス語の中間構文形成規則は、基底の目的語の一定の状態変化を記述する受動的意味構造に適用され、このような意味構造をもつ動詞が中間用法をもつことを明らかにした。

しかし、それぞれの言語の中間動詞は、それぞれ異なる形態的特徴をとるにもかかわらず、基底の目的語が指示する主体と不特定多数の行為者の行為一般との関係を表す意義しかもちえない点で共通している。これは、それぞれの言語が中間構文の一般的特徴を満たさなければならないことから帰結することに注目し、先行研究によって明らかにされた英語の中間構文の一般的特徴をそれぞれの言語に照らし合わせた結果、それぞれの言語の中間構文は、派生的に得られる構文であるためであると述べた。

第5章では、使役構文を考察した。使役構文に主語の直接的な行為が原因（CAUSE）となつて、直接目的語の状態変化が引き起こされることを表す直接使役の意味と直接目的語が被使役主によって引き起こされることを表す間接使役の意味があることを前提に、韓国語と日本語に

は直接使役と間接使役の意味を表す仕方に二通りがあることを指摘した。韓国語では、一つは動詞の語幹に生産的使役形態素 *-keyha-* を規則的に付加することができる生産的使役構文を用いる方法であり、もう一つは、動詞の語幹に *i* 系接尾辞、すなわち、*-i-*、*-hi-*、*-li-*、*-ki-*、*-wu-*、*-kwu-*、*-chwu-* が付加された語彙的使役構文を用いる方法である。本論では、韓国語の語彙的使役動詞を構成する *i* 系接尾辞に働いている意味条件に注目し、この条件が韓国語の語彙的使役動詞の意味特徴を支配していることを明らかにした。*i* 系接尾辞は目的語の被影響性を記述する他動詞とのみ結合し、また、*i* 系接尾辞を含んだ語彙的使役動詞は受動の意味をもつことから、*i* 系接尾辞は被影響性の意味素性をもっており、さらに、文に完結性という意味特徴を付与し、意味受動化操作を引き起こす。したがって、韓国語の語彙的使役動詞の意味的な多様性は語彙的使役動詞が意味受動化操作を受けるか否かによって説明できることを議論した。

従来、韓国語の語彙的使役構文が生産的使役構文と同義かどうかという問題をめぐって多くの議論が行われてきた。

しかし、日本語との比較によって、韓国語の語彙的使役動詞は先行研究ではとらえることのできない事実があることを示した。つまり、韓国語の語彙的使役動詞は形態的に一語でありながら、意味的に直接使役と間接使役の意味構造をもち、統語的に単文構造と複文構造をしており、その帰結として日本語の語彙的使役動詞と生産的使役動詞に対応させることができることを示した。

まず韓国語の語彙的使役動詞の特徴は、日本語の語彙的使役動詞、生産的使役動詞との形態的特徴を比較することから述べた。韓国語の語彙的使役動詞は接尾辞が動詞と分離できない密着語である点で、日本語の語彙的使役動詞に対応する。しかし、韓国語の語彙的使役動詞を構成する *i* 系接尾辞は、それ自体分離できない最小単位の形態素である点で、日本語の生産的使役形態素 *-ase-* に対応させることができる。一方、韓国語の生産的使役動詞を構成する生産的使役形態素 *-keyha-* は、日本語の生産的使役形態素 *-ase-* と「ようにする」の両方の形態的特徴を合わせ持つ。すなわち、韓国語の生産的使役動詞は複合語である点で、日本語の生産的使役動詞に対応させることができるが、韓国語の生産的使役形態素 *-keyha-* は、さらに *-key-* と *-ha-* の間に決定詞の編入を可能にすることから、日本語の「ようにする」に対応していることを議論した。したがって、韓国語の語彙的使役動詞は日本語の語彙的使役動詞と生産的使役動詞に、韓国語の生産的使役動詞は日本語の生産的使役動詞と「V- ようにする」に対応していることを指摘した。

次に、韓国語の語彙的使役動詞の特徴は日本語の語彙的使役動詞、生産的使役動詞の意味的特徴を比較することで検討した。韓国語では、使役の意味構造（直接使役と間接使役の意味構造）が非対格自動詞、非能格自動詞、再帰動詞、他動詞の意味構造に主語をもつ使役形態素が

付加された結果、得られる。非対格自動詞の意味構造から得られる語彙的使役動詞は、直接使役の意味構造だけを、非能格自動詞と再帰動詞の意味構造から得られる語彙的使役動詞は、直接使役と間接使役の意味構造を、他動詞の意味構造から得られる語彙的使役動詞は、間接使役の意味構造だけをもつことがわかった。したがって、直接使役の意味構造だけをもつ語彙的使役動詞は、日本語の語彙的使役動詞に、間接使役の意味構造をもつ語彙的使役動詞は、日本語の生産的使役動詞に対応していることを明らかにした。

さらに、韓国語の語彙的使役動詞の特徴は、日本語の語彙的使役動詞、生産的使役動詞の統語的特徴を比較することによって検討した。間接使役の意味構造をもつ語彙的使役動詞には、韓国語と日本語の生産的使役動詞と同様に、統語構造で適用される諸規則が適用される。すなわち、韓国語と日本語の生産的使役動詞に生起する副詞（節）や再帰代名詞は、使役主と被使役主の両方を修飾するが、間接使役の意味をもつ語彙的使役動詞にも同様の現象が起こる。このことから、統語的特徴のみにもとづいて、韓国語の語彙的使役動詞を生産的使役動詞と区別することはできず、その帰結として韓国語の語彙的使役動詞が日本語の語彙的使役動詞、生産的使役動詞に対応するとすると、その理由を説明できないことを議論した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、構文の全体的意味は動詞接尾辞の意味特徴に支配されており、構文自体は基本構文から成り立っているとする従来の構文論的研究における問題点を克服し、各構文は基本的な統語構造に一定の意味条件および意味規則が適用されて得られる派生的な構文であることを明らかにしたものである。

本論文は、第1章序論から第6章までの6章から成っている。

第1章序論では、本研究の目的と本論文の構成について述べる。

第2章では、日本語の自発文の意味構造は基本構文の統語構造そのものからではなく、一定の語彙的意味をもつ自動詞および受動形動詞の統語構造から派生的に得られる用法であることを論ずる。先行研究によって提案された自発文の形態的・統語的・意味的特徴は、自発文と自動詞構文、受動構文、可能構文、中間構文とを区別することができないとして、自発構文に固有の意味的制約を導き出す必要性を指摘し、自発用法と他の構文の用法との相違点を明確にすることによって、自発用法は基底の目的語の主体的な状態変化を記述するという点で、他の構文の用法の意味構造と区別される独立した用法であることを述べる。

第3章では、自発用法の成立を可能にする特質として、主語の行為者性（agentivity）に着

目し、自発用法が無生物主語に組み込まれた行為者性による自発的な状態変化を記述する構造であることを論ずる。行為者性のあり方の違いにもとづき、自発用法が成立するためには「無生物の行為者性にかかわる条件」、「無生物主語が自然行為者の行為対象である条件」、「有生主体の無意志性にかかわる条件」が必要であることを示した。

第一の条件を満たす自動詞構文では、外部行為者は統語的にも意味的にも含意されない。これは、述語が主語の自発的な状態変化を記述する非対格自動詞であること、使役化の操作が適用されること、自発的な状態変化を表わす副詞との共起が許容されること、無生物主語の自発的な状態変化を含意すること、外部行為者の関与を示唆する表現との共起が許容されないことから説明される。第二の条件では、無生物主語が自然行為者 (natural agent) の外力を受け、本来もっていた行為者性が活性化するが、その無生物主語は単なる行為の対象というよりも状態変化の実質的な主体として解されるべきであることを主張する。第三の条件における有生主体の無意志性は、この条件をもつ自動詞構文および受動構文が擬似分裂文や命令文に生じないこと、目的節、行為者指向の副詞などと共起しないことから説明され、この無意志性が主語に加えられた行為者性によって活性化すると指摘される。

第4章では、中間構文を主語つまり基底の目的語が指示する主体と一般者の行為一般との関係を表わす意義しかもたない派生構文として定義し、日本語の中間構文は中間自動詞構文、中間可能構文として自動詞構文と可能構文から派生されること、韓国語の中間構文は中間自動詞構文、中間受動構文として自動詞構文、受動構文から派生されること、ロマンス語の中間構文は中間受動構文として非人称受動構文から派生されることとして、各言語に特定の中間構文形成規則が適用されることによって中間構文の意味構造が得られると論じる。さらに、形態的特徴がそれぞれ異なっているにもかかわらず、中間構文として各言語が共通に示している上述の特徴は、状態化の操作を受けること、基底の他動詞の主語の $\theta$ 役割 (不特定多数の行為者) が含意されること、総称的解釈を許容すること、難易副詞の補助がなければ適格性が保たれないこと、受動可能文に書き直すことができることから説明できると述べる。この分析は、英語の中間構文の研究で明らかにされた中間構文の一般的特徴を日本語、韓国語、ロマンス語に適用して、構文研究の類型論的な広がりの可能性を示したものとして注目される。

第5章では、韓国語の使役構文の特徴と日本語の使役構文の特徴を対照言語学的に考察している。-i- 形接尾辞を付加する語彙的使役動詞に対する従来の分析の問題点を指摘し、意味にもとづく分析を用いて、使役の意味構造は非対格自動詞、非能格自動詞、再帰動詞、他動詞の意味構造に -i- 形接尾辞が付加されて得られることを論じ、韓国語の語彙的使役動詞の特徴が形態的、統語的、意味的特徴に関して日本語の語彙的使役動詞と生産的使役動詞との比較によって明らかにされる。形態的には、韓国語「V-i-」は日本語「V-e-」に対応するが、韓国語「V-



keyha-」は日本語「V-sase-」に対応しながら同時に、-key- と -ha- の間に決定詞の挿入が可能であることから、日本語「V-ように-する」にも対応していると述べる。統語的特徴については、韓国語と日本語の生産的使役動詞に生起する動詞（節）や再帰代名詞は使役主と被使役主の両方を修飾するが、間接使役の意味をもつ語彙的使役動詞にもこれと同じ規則が適用されるゆえに、統語的特徴のみにもとづいて、韓国語の語彙的使役動詞を生産的使役動詞から区別することはできないことを示した。最後に、韓国語の語彙的使役動詞の意味的特徴に関して、非対格自動詞から得られる語彙的使役動詞は直接使役の意味構造を、非能格自動詞と再帰動詞から得られる語彙的使役動詞は直接使役と間接使役の意味構造を、他動詞から得られる語彙的使役動詞は間接使役の意味構造のみをもつことを明らかにするとともに、直接使役の意味構造のみをもつ語彙的使役動詞は日本語の語彙的使役動詞に、間接使役の意味構造を持つ語彙的使役動詞は日本語の生産的使役動詞に対応していることを論じ、このような語彙的使役動詞の多義性は、-i- 形接尾辞の完結性と意味受動化規則によって説明できることを示した。-i- 形接尾辞は再帰動詞および目的語の被影響性を記述する他動詞とのみ結合し、また、-i- 形接尾辞を含む再帰および他動使役動詞が受動の意味をもつことから、-i- 形接尾辞は被影響性の意味素性をもっているなどの指摘は、従来の分析では得られなかった成果である。

第6章では、本研究の各分析の要点を述べる。

以上、本論文は、自発・中間・使役文がそれぞれ一定の統語構造に意味条件と意味規則を適用することによって得られる派生的意味構造をもった構文であることを実証的に分析するとともに、韓国語と日本語との間に見られる文構造の多義性を類型論的に考察する可能性を広げた点において、斯学の発展に寄与するものである。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。